

武蔵野大学
工学部 サステナビリティ学科 准教授

磯部 孝行 氏

【専門】建築構法、ライフサイクルアセスメント、資源循環

【主な活動】日本サステナブル建築協会 ゼロカーボンビル推進会議 ホールライフカーボン基本問題検討WG 委員、日本サステナブル建築協会 ゼロカーボンビル推進会議 データベース検討SWG 委員、日本サステナブル建築協会 LCCM住宅・建築物研究開発委員会 委員、日本建築学会 LCA小委員会 幹事、日本建築学会 解体から始まる循環型建築学特別調査委員会 委員、日本建築学会 脱炭素都市・建築アクションプラン特別調査委員会 委員 等



意欲的な環境対策の積極的なアピールを

全体的に、エネルギーから廃棄物対策まで包括的な環境対策を講じており、今回の環境報告書も充実した内容となっています。「UR-eco Plan 2024」(P16) では、太陽光発電の設置50%以上、電動車割合100%、LED照明の導入100%、再生可能エネルギー割合100%と、非常に野心的な数値目標を掲げています。UR都市機構がCO₂削減対策に本気で向き合っているという企業姿勢をアピールされるとよいと思います。加えて、数値だけでなく、URがトップに位置する分野なども記載してはいかがでしょうか。

また、資源循環の取組みとして、国内のストック活用や廃材の利用が進んでいる点も素晴らしいです。スケルトンインフィル住宅の研究やストック活用の実績は、世界に先駆けた取組みであり、研究的な資産でもあります。他にもこのような先進的な取組みをされていると思いますので、対外的にアピールするとよいと思います。

さらに、コミュニティへの配慮や防災、災害復興の取組みなど、社会性の高い取組みも多くあるかと思います。環境報告書ではありますが、より踏み込んで環境、社会、企業統治の3つの領域も意識して開示されるとよいと思います。

広い空間を有効活用した「豊かさ」の提供

東京都心部や都市部では地価が高く、一人当たりの居住面積が十分とはいえない空間で暮らすケースは珍しくありません。しかし、それが本当に豊かな生活といえるのかは疑問です。UR都市機構が提供する広い住空間には、「豊かさ」という意味で大きな意義があり、本報告書でアピールする価値があると思います。また、既存のストックを活用して資源を使わずにより豊かな住宅を提供できることは、大きな価値です。サーキュラーエコノミーの切り口でこれまでの取組みを整理すると、多くの具体的な事例を紹介できるのではと思います。

その他、コミュニティガーデンや里山のような環境を作ること、住人が豊かに生活できる提案も考えられます。また、子育て世代の目線に立ち、子どもたちが自由に遊べる環境を整える配慮も一つの視点だと思います。

今後も国際的な役割を期待

最後に、昨年度の有識者からご指摘のあった、海外への積極的な情報発信については、英語版のダイジェストの公表がなされているほか、本報告書の「まちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用した環境配慮の提案」(P48～)において、インドネシアとの連携など国際的な取組みを掲載しており、しっかり対応されていることがわかります。今後も国際的な役割を担っていくことを期待しています。